

蹄 跡

部 報 Ⅵ

1961 July

新入生のための夏期合宿特集号

北 大 馬 術 部

目次

合楯に思う	2
馬体の手入れについて	3
小山毅	3
乗馬の要件	6
勒について	11
玉沢	11
馬術講習	15
岡田征至	15
何故私は馬術部へ入ったか	18
滝沢英子	18
後記	19
宮崎	19

合宿に思う

いよいよ一年生諸君には待望の合宿となった訳だがこの合宿の意義と云うものについて、私が入部した当座より現任退役となった今日までに尚も変らずに胸裡に深く喰い込んでいる理想を四年目の退役の身ながら書き記し、各個人に検討されてそれにより、一年生諸君の北大馬術部に於ける存在理由とどの認識を明確にしていたべき、更に北大馬術部の発展に寄与していただきたいと切に希望するものである。

私が入部した時のパンフホーンたる四年生は、五年目の樋口先輩及び、生田主将、千葉幹夫、村山哲、それに鎌田氏等の諸先輩の強力なる布陣であった。いわゆる、北大の黄金時代を築いた先人達であった。

私はこれら先輩諸兄からは直接手を取っての指導は受けなかつたが、自分自身の眼で見た先人達の一挙手一動作は、現在に於いては多大なる影響をもつたことは云うに遅くないのである。

私としては、当時は無防備に上級生の言動を吸収しようとして、そして吸収もした積りだ。しかし学年

が重なるにつれて、自分なりに他の人々、たとえば、井上天人、瀬野町氏、小松崎氏（即前氏）などの日本一流といわれる人たちの騎乗などを見て、自分の技術に出来ないながらも肉付けしてきた。そして四年目の収穫が諸君のみる通りのものであったのである。但し完全に吸収消化は出来なかつた。私独自の癖も出た。これは諸君にはあまりみてもらいたくないものである。合宿というのは何も技術のみをみればかりではない。大学の馬術部はあらゆる仕事が含まれて始めてその存在が公に認められるものなのだ。したがって、「厩七分に乗り三分の言葉の通り、七分の仕事によって貯えられた力を十二分に技術の練磨に向けなければならぬ。」「厩七分の七分というのは何も消耗力を示す数値ではないのである。

私の理想は自分ながら言語には表わせない。しかし今まで述べた中に、それは簡単ながら含めた積りである。最後に、私が四年間に行つた試合の内から、胆に銘じた争どもを諸君にも銘記していただきたい。それは私は試合に行つて、敗れたときよく用いる言葉に「敗軍の将兵を語らず」というのがあるが、これをしばしば使っているうちにふと気がついたことなのだ。

私は常に馬に対して「将したらんど欲したが故に、

「将したり得なかつたのだと。」「人馬は常に持たらず
 兵たらすし。馬術とは人馬一体なること、あらためて
 体験した。同時に私の馬術はこれから始まるのだとい
 うことも、四年目にして始めて知った。この私の馬術
 開眼も、もとはと云えば、一年生の時の合宿より始ま
 り、四年の合宿にしてはるうじて辿り着いた早頭と云
 えない事もない。」

諸君の奮斗を祈ってやまない。

簡単ながら一年生諸君に、合宿に際して一言申し上
 げる。細部に亘っては三年生諸君の指導を受けられた
 し。

馬体の手入れについて

小山 毅

① 極めて経験的に述べる — 手入れの目的

イ 馬体の怪我、疾病の早期発見及び予防。

ロ 馬体を常に清潔に保つ。ということとは、たゞ習
 慣的にきれいなどころをこするのではなく、汚い
 ところをきれいにすることである。

② 乗馬前の手入れで特に気をつけること。

イ 馬体に外傷がないかどうかを調べる。特に蹄（
 馬の全生命ともいえる）、セミネ、四肢（つまま
 きをしていないかどうか）。

ロ 内部疾患（馬糞や肛門周辺の汚れ具合である程
 度わかる。発情がきているかどうかも尿の汚れで
 わかる）。馬体が疲労していないかどうか。

③ 装鞍・装束の際の注意

馬体に穴損を起させないようにすること。練習後に内
 部疾患、外傷が発見されることは、乗馬前にそれら
 がなかったのなら、概ね装鞍者の責任である。

尚、乗馬前の手入れは、正しい装鞍による乗馬後の
 準備運動との一環をなすものであって、馬体のしこ
 りをとき、適度の緊張感を与え、本運動に備えるも
 のであるから、決しておろそかにできない。従って
 時間に入れて、そのまゝ装鞍するがごときは、慎む
 べきである。

④ 乗馬后 馬装を解く際の注意

イ 馬場からの帰りみちや水を与える際に、腹帯を
 下に下げたまゝだったり、鞍をあげていなかっ
 た
 リ、マルタンで腹帯に通す部分をぶら下げたまゝ
 だ。ったりするのを散見するが、馬体を穴損する原
 因であるからやらぬこと。現に、物を見た馬が

さがつたまゝの鍔に後肢をひっかけ、ますます狂奔し、とうとう後肢を折ってしまったということがある。馬体管理は十中十まで人間の責任である。

口 汗を著しくかいている場合は、暫時毛布をのせておくこと。又急に水をのませないこと。

尚、乗馬後の手入れは、馬体損傷の発見と疲労を残さぬためのマツサージが重要な意味をもってくる。

⑤ 蹄の手入れ

蹄は馬体を支える部分であり、最も重要であるから、最初に行うことを原則とする。左前、左後、右後、右前が正しい順序とされている。鉄ピで泥を落とし、入念に水洗いする。尚、後肢の側の馬糞はすぐとること。特に蹄又の部分。次に蹄油を塗る。これは殺菌と適度のしめり気を与えて、乾燥による裂蹄や蹄叉腐乱を防ぐためである。腐乱すると、悪臭でわかるから充分注意すること。蹄油を塗る際には、ただだぶつけずに、こすりつけること。又水がなま乾きの時塗らないと意味がない。蹄冠には塗らないこと。毛やごみがこびりついて不潔になるから。水洗いの際にはつなぎの部分の水はきれいに拭きとること。こゝに泥水がたまっている時、冬などはひびわれがしたり（人間のあかぎれと同じ）する。

特につなまきの場のある蹄において注意。尚、蹄鉄に注意のこと。練習中に落蹄するなどは論外である。

⑥ 全身のマツサージ

順序としては頭の方から尻へ、左側から右側が原則。セミネを傷めてないか、拍車傷がないか、等を調べ、障害を行ったり、転倒したりした際には特に注意すること。

鞍下の部分、わきあい、帯道は、良く汗をとり、四肢と共に入念にマツサージし、血行を良くして疲労回復を図る。北粟や北香の杯に腫脹をちよいちよいやる馬では特にマツサージが大切である。

方法はわら、根フラス、毛フラスの順に行い、必要ならば、金ぐしを使うが、骨などには当てないこと。前から後ろへ、あるいは上から下へ大きく動かすこと。同じ部分をこちよこちよさするのは、馬もいやがるし、マツサージの効果も半減する。毛フラスは一度逆までしてから仕上げる。毛フラスのこみをおとす時には金ぐしを外から内に動かす。毛が抜けないようにすること。

最後にくしで、タテ鞍、尻尾を整える。

⑦ 蹄に不潔な部分について

最初にもいったように、手入れが終ったら馬体が美

しく清潔でなくてはならない。肛門・口・鼻・球節・飛節の部分は汚れやすいから、水洗いしてやること。尻を洗うには尻尾をつかんで安全を図ること。尻尾が汚れている際はバケツか蹄洗桶を持ち上げて尻尾を中に入れて洗い、しかる後に水を切る。四肢の汚れは必ず落すこと。特に牡犂、朝清は目立つ。白い毛はいつも白くしておくべし。水で落ちなければ、石けんを使う。

⑧ 特に激しく汗をかいた場合

汗取り益へ部にはないがすぐくくれるを使う。あるいは全身に水をかける。但し急激にやってはいけない。経験的にいってこのぐらいの暑さや運動量ではほゞ必要ない。

⑨ 手入れる人間における注意事項

イ、位置、蹄は人間が馬と反対の向きになって持つこと。蹄を自分の腹に向けてだきかゝえているのを一度見たことがあるが、生命にかゝわる程危険である。あげる時には体でおしてやってあげ易くし、自分の体重とひびで支えてやり、馬が重心をヒリ易くさせ、しかる後はがっちり支持すること。前人間の足は馬の両肢の中間に片足をいれ、決して馬体の反対側に人間の足がでるようなことはさせること。馬が反対の肢でけったりした場合は

危険である。

その他の際は常に馬体の横に位置し、マンサージ等をする際には必ず片手で、うなじ等を支持し、馬を廻撫して安心感を与え、後方にまわる際には尻尾をつかむこと。馬体から離れすぎないこと。余り馬の目を見ないこと。

ロ、馬があばれる時、馬が不快なことがあるから、その原因を除くこと。声をかけてやること。赤チンをつけようとする場合で危い時は、足をあげさせて、けるのをみせぐこと。

尚、これは手入れだけには限らないが、馬をつなぐ際には必ずすぐほどけるようにしておくこと。装具をこわしたり、外傷の原因となる。現にロープを切ってしまった馬が後方に捌れ、頭を打って昇天したことがある。

ハ、懲戒について。手入れの際、慣れてくると良く大声を出して馬をしかり、はかない優越感にひたることがあるが、生半可な懲戒は決してすべきでない。人間の責任をもの云わぬ馬におしつけるのは殺生である。各馬のくせをよくのみこみ、素直に行うことがオ一である。倒えば北斗は後肢を二、三度けるまねをするが、そのまゝ素直に支持すればよいのである。強引に後ろにひっぱって大声をあげて、竟に従わ

せても、それは正しくない。

二、外傷・疾病を発見したら、直ちに上級生や馬匹係に知らせ、死急処置をし、必要とあらば、病院につれて行くこと。

ホ、馬具については、他の人の詳論があると照うので省略するが、馬体と同杯手入れすること。殊に馬具・馬具が不完全なことは、直接、人間の安全に關連することを銘記されたい。

ハ、手入れは愛馬心をもって、入念にしかも敏速に行うこと。

(甚だ得手勝手に天札)

以上

乗馬の要件

馬乗りの常識と思われる事項に關して一言述べる。

オ一 部

- 一、馬乗りたる者は常に馬に接し、馬の関心をひきつけ、それに対し、適切なる愛撫を送る。いたづらな愛撫は馬を冗慢にする。
- 二、馬乗りたる者は、常に冷静に馬の動作・表情を感

知しなければならぬ。

三、馬乗りたる者は、常に愛馬技を磨き出すべきである。

四、馬乗りたる者は、常に馬具の整理に留意せねばならない。清潔に保つこと、人、馬に相通ず。

五、馬乗りたる者は、常に馬体を清潔にし、馬体に光沢あらしめること。

六、馬乗りたる者は、常に健康に留意せねばならない。

七、馬乗りたる者は、常に冷静にして、徒らに馬を叱

つてはいけぬ。

オ二 部

一、装鞍前後の手入れは入念に行うこと、ある程度の血行の円滑化を図ること。

二、装鞍は常に締密なる注意の下に行わなければならぬ。特に鞍の位置、腹帯の強さなどは大切である。

三、腹帯擦傷は、馬乗りとして最大の恥と心得べきだ。

三、引き馬は常に冷静にしてかつ節度のあるものでなければならぬ。それには、乗り手の心が緊張して

おり、心は馬と夫にあらねばならない。

四、馬場に整列した時は、直ちに馬検点検を行い、馬を愛撫し、落着かせること。

五、乗馬は常に節度を保つこと、ガラガラと乗馬するのは、馬にいや氣を起さしめ、鬼聲の原因ともなるのである。

六、乗馬したら直ちに手綱を両手に分ち、しっかりと保持し、しかる後鏡をはき、騎座を保定する。

七、その後は、直ちに馬を真直にし、人は真直ぐ前方を見、背を伸ばし、腰を張って、馬に前進氣勢を起さしめ、発進の号令を待つ。

オ 三 部

一、前歩運動の重要性を認識しなければならぬ。

イ、前歩運動により、初心者は運歩を、騎坐、脚及び坐骨で感知することを習得せねばならない。例えは、運歩の際に、馬のどの肢が地にあり、又どの肢が地を踏んでいるかなどを、馬の前駆の動き腰のずれなどから容易に感知することが出来る。勿論、意欲がなければいけない。乗り手の「さあやるぞ、し」という気力は、更に馬の前進氣勢をも醸し出すことになる。

ロ、前歩運歩の完全なる修得は、高等馬術へのオー歩ともなる。

ハ、前歩による「輪乗り」「巻乗り」「二蹄蹴」運動は、人馬の調教過程をみるのに欠くことの出来ない運動である。これらの要領については後に述べる。

ニ、可速歩運動の重要性

初心者に於ては前歩よりも、速歩を好んでやり

たがるのが通例のようだ。もちろん速歩も馬術に於ては、前歩同様非常に重要であることは間違いないが、これを修得するには相当の年類というよりは、大学の馬術部に於ては相当鞍鞍が多くなければならぬ。

馬にもよるが、一般に初心者が速歩を行って感ずることは次のようなものだろう。

イ、尻にボンボンと馬の尻撞が直接くる。

ロ、尻がだんだん鞍の後方に移動する。

ハ、膝が上がってくる。

ニ、上体が左右にゆれだし上体の保持に苦痛を感ずるようになる。

ホ、ついには上体をふくらはぎだけで保定しようとする努力するが、隅角や馬が横つ飛びしたようなときは重心が馬体から遠く離れ、落馬の憂き目を見る。大体以上のことが連続して起るのではないかと思われる。

三、それでは初心者は如何にすればこの苦痛を解消出来るか。

イ、オーに乗馬とは苦しいものと観念することが条件である。

またえられることを本望と考えなければならぬ。練習に耐えられないようでは、何事も本懐を

とげることとはできないだろう。

口、諸君は乗乗りを御存知と思いが、乗乗りの時竟外に馬が良く前に出て行き、その割に腰が落ちて、いてゐるのに気が付くと思ふ。

私の経験からはこれが最大最良の示唆である。その他は各自ゴツゴツと冷静に自分の姿勢を分析しなから体得する以外に方法はないだろう。

前屈したように、他人の姿勢を常に分析して、自分に取り入れることは最も良い勉強となることを強調したい。

オ 四 部

一、内方姿勢とはどんなことか。

これは全ての運動の根本である。しかもこれには馬体の各部の動きを、馬上において、充分感知出来る能力を騎手が有することしという前提が必要である。

内方だから、馬首を内側に向ければよいのだらうと云うのはいけない。

首の曲がり、肩の入り探、腰の入り探、内方姿勢に於ける馬体の真直性等、騎手の敏感なる五感と冷静さが、絶対必要である。これらの訓練は常に於て常に騎手自ら行わねばならない。

二、初心者は如何にして内方姿勢をおぼえるか。

イ、初心者は良く調教された馬に於て、その内方姿勢を観察しなければならぬ。

- 馬体が同心円上の一부를形成しているか。
- 馬体に無理がないか。
- 後軀の踏込みが同心円上よりずれてはいないか。

ロ、初心者が内方姿勢を騎乗によりおぼえるときはできるだけよい馬に乗ること。

先ず騎手は、馬が隅角を併歩で通過するときの馬の動き、状態が騎手にいかに伝わるかを、すばやく感知しなければならぬ。

又、その時に自分がいかなる姿勢をとれば、馬は乗に隅角を通過するかを、初心者は馬から教わらなければならぬ。

三、初心者が巻乗りを習得するには、

イ、前述の馬体の動きを、併歩により充分修得出来る者は、比較的良好に巻乗りを行う。

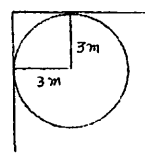
ロ、つまり隅角を正確に通過することは既に巻乗りの四分の一を行つた事になるからである。

ハ、馬が勝手に隅角を通過するのでなく、騎手たる諸君が、正しき隅角の通過を、諸君の意志通り行

いうるなら、その扶助を連続して四回与えれば、すなわち巻乗りは完成するのである。

二、内方姿勢の騎乗は前述の如く、全く馬術の馬術的運動の基本的な条件だから、更に言を贅しておく。

※先ず、隅角を正しく通過するさいの、蹄跡は如何程であるか？ それは半径三米の円周上の四分の一を内方姿勢で通過し、隅角通過前と後の蹄跡は互に直角である。



※「隅角通過の際」隅角通過中（馬体の一部又は全部が前記円周上にある時）の馬の体勢はどうかであるか。四肢は正しく蹄跡を踏み、馬の両肩を結ぶ線の延長と、両腰を結ぶ線の延長とは前記の円周を与える円の中心と一致する。首は蹄跡の直上にある。このため、馬の内方腹と首は強く収縮し、外方は伸展する。これだけが外より見える体勢のすべてであるか？ 隅角通過及び巻乗は云うまでもなく曲線運動である。であれば当然、遠心力が切く、この時、これに

応ずる体勢が馬には無いのであるか？ この時には馬は円周の内方へ、わずかに体を斜にするのである。歩度が増加すれば、その度は大になる。駈歩では明かにそれがみとめられる。正しい巻乗、隅角通過には、頭の廻し、この体軸に平行でなければならぬ。馬の頸が内方へひねられていような（多くの場合、内方手綱の控えずぎによる）隅角通過、巻乗等は、如何に他の部分が正しく運動していても、それは全く正しくない。

オ 五 部

これまでに諸君は、馬にいろいろな事を教わったわけであるが、この章で更に、人間が馬に与える命令としての扶助の解説を少しなす。

- 一、扶助には、主扶助と副扶助がある。
- 主扶助とは、馬を積極的に支配するために又、車の出乗め扶助である。もはやこれなくしては、全く馬術でない。否、馬を動かさしめることすら不可能である。
- 副扶助とは、主扶助を助け、応援する主扶助以外の一切の扶助を云う。
- 主扶助には腰の扶助、脚の扶助、拳こぶしの扶助の三つがある。
- 副扶助には、拍車の扶助、鞭の扶助、音声による扶

助の三つがある。

二、脚の扶助は、尻直又は整打することにつきて、目的は、馬に前進の意欲を与える。脚は常に紙一枚はさんで落ちぬ程度にかるく馬腹にぞえ、つま先を器体に平行にする。

三、腰の扶助とは、腰の筋肉をはる事によつて、坐骨を斜前方へ向かつておし出すこと。その結果、木ウサイ部はますます鞍の前橋をおし、騎坐はますます深くなる。腰を張ったのに、かゝる結果が感知されねば、正しく腰が張られていないのである。

腰は脚とこぶしをつなぐ重要点であり、その扶助を正確にマスターする事なくして、馬術に上達する事はできない。

具体的に、腰が張られている状態を、三のべる。

イ、脛を立てて、仰向けに寝て腰を持ち上げる。(腰を張らねば決して腰を持ち上げ得ぬ)

ロ、フランクに腰かけて乗り、フランクをこぐ。腰を張らねば決してフランクは動かぬ。

ハ、小さな軽い椅子に腰掛け、それを斜前方へ傾ける。腰を張らねば椅子は決して前方へ傾かぬ。

ニ、机にはみ出すように本をのせ、机に向つて立ち手を用いず、本を押しやる、腰を張らねば決して本を押しやり得ぬ。

腰は常に両腰を同時に張るとはかざらぬ。方向転換

巻乗、駈歩、二蹄跡運動等では、片腰が強く張られる。そのさい、同時に、張った方の腰へ、体重の転換が伴わねばならぬ。体重の転換の不正(折れた腰と云う)は、馬に非常な苦痛を与える。背の軟かい馬は、両座

骨に均等なる体重の配分、両脚の均等なる接触なくしては、決して直進運動を行い得ぬ。もし諸君がかゝる馬に乗れば、最早直進(直線行進)は不可能である。

諸君が現在直進がなかなか思ふように行かないのも、このためである。

前述の小椅子に腰掛け、片腰をはると、その腰の方へ椅子はかたむく。

このように、乗馬にとつては、腰は特に大切である。両腰を効果的に充分に張ること、任意片腰を同様に張る事に、十分に熟練するように。

四、拳の扶助には三種ある。即ち、控え、緩め、押しである。

正しいこぶしとは、手首の所で、折曲らず、伏し拳に(手の甲が上をむく)ならず、手のひらが仰空せず肩は力が入ってはず、肘はわき腹から離れてはず、そこから前腕が自然に下腹の方へ向い、手首は凝固せず常に柔軟に保たれ、それに附随して坐直に保ち、かるくにぎった手(たなごころに卵一ヶ入るくらいに)。

手綱を握指と人さし指とでしつかりと取っている（反
撞のたびに手綱かのびたり、馬が首をのびした時、す
ーっとのびて行く手綱の握り方は不可）それであり、
その位置はキエウの両側に両コマシが保たれている、
そういうコマシである。もう一度念を押す、キエウの
両側に位置し（必ず高くない事）手綱をしつかり
握った柔軟なコマシが正しいコマシである。

イ、控えし正しきコマシを、乗手の方へ何つてひね
る。両側同時に行う——滅却。片側のみを控えた
側への方向転換、巻乗、二蹄跡運動等。

ロ、緩めし控えた手綱をもとの正しい位置にもどす。
正しい位置より更に緩める。このときは拳は伏拳
になる。両方同時に一前進歩度の増加、休め等。
ハ、正しし手綱の操作の中で一番むづかしい操作。

手綱とケンで馬の首、肩を反対側へ圧しやる。巻
乗、蛇乗、二蹄跡等で非常に大切。少くとも今合
宿で常歩での蛇乗を主に圧し手綱のみで行いうる
ように努められたし。

こゝでのべたこぶしの操作し手綱の扶助は、全
て障礙、飛越を目的とするものである。従つて、
こぶしの柔軟にして充分控し、充分静止させる必
要がある。

勒について

玉 沢

馬乗りとして知っておくべき、ごく初歩的な勒につ
いての常識を記す。勒には大別して大勒と水勒との二
種がある。

○水勒（北巻、北揚、朝清等に用いる勒）

水勒銜身、中央で折りまげる事が出来るようになつ
ており、両端に大きな環のついた銜。

水勒の利点

利きが柔い、片方だけを利かし得る（中央で折れま
がるから）

水勒は次の部分よりなる。（図参照）

水勒銜身、頰革、頸革、頸紐、頰革、手綱

○マルタンガール付水勒（北巻、北揚に用いている勒）

我部で用いているのは、マルタンガール、ド、シヤ
ッセ（*Martingale de chaise*）と云われているもの
である。

マルタンガールには、他にマルタンガール、チテ
エール（*Martingale tétière*）とマルタンガール、ド
フィックス（*Martingale de fixe*）とがある。

マルタンガールチエールが初心者には一番悪理がなくてよい。マルタンガールドライクスは、技術的に高度のもので、殆んど使用されていない。
 ○マルタンつき小鞆の利点

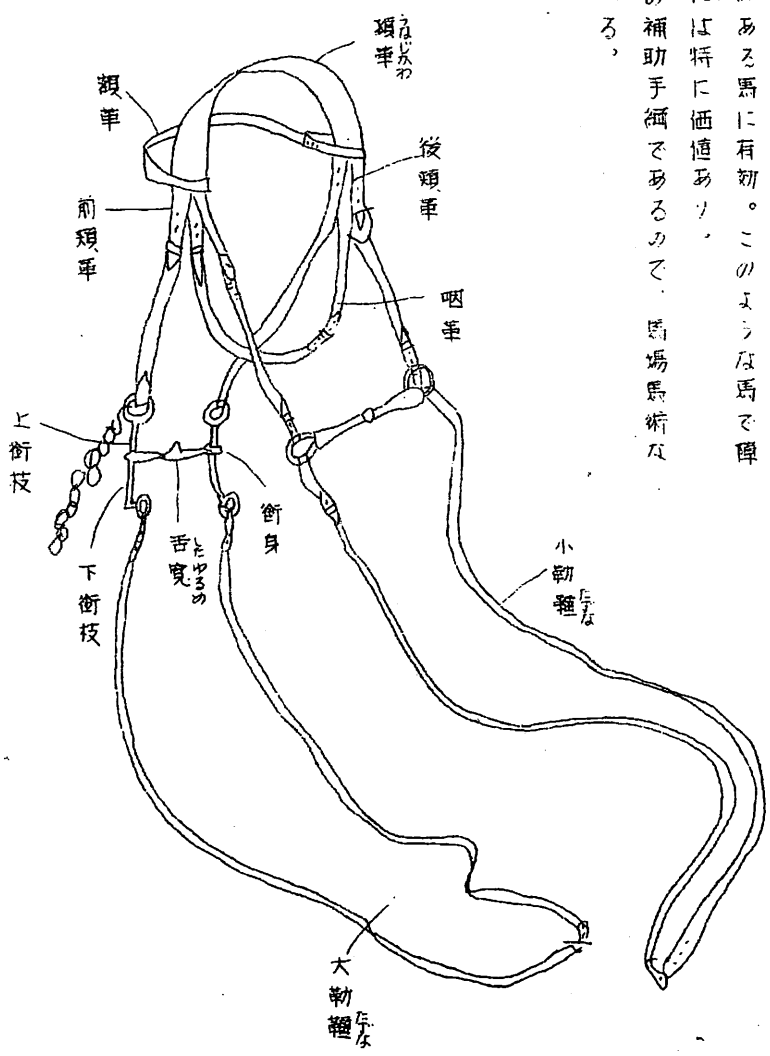
頭を上げるくせのある馬に有効。このような馬で障害飛越を行うさいには特に価値あり。
 マルタンは一種の補助手綱であるので、馬場馬術などでは禁止されている。

○大鞆

馬場馬術に高度な収縮姿を要求される高等馬術には、又ここの出来ない鞆である。

我部では北楡、北斗、北涼に密着用いている鞆がそれである。
 大鞆はその馬の口に一番よくあうのをえらばねばならぬ、即

ち、口中の広い馬には、巾広い大鞆銜身を、又馬の口の敏感さの度合により、上枝と下枝の比率も決定される。又、舌を越す癖のある馬には、舌通しの高いものを、いろいろ細心にわたる注意が必要なのである。



大小鞆銜の各部の名称

直遙鞍 前・後 橋共高く その結果 鞍壺は深くなり、深くゆつ

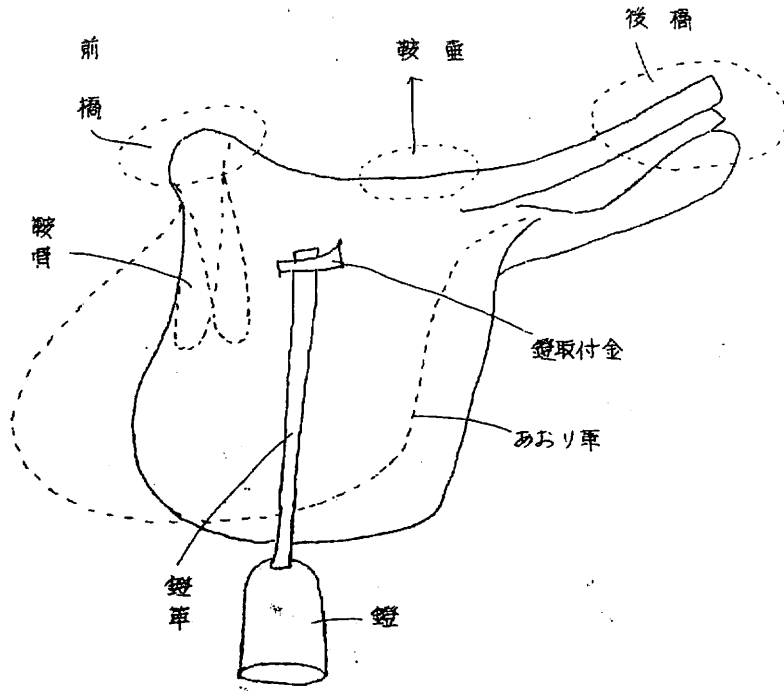
たりとした安楽な騎座がえられ、長途にわたる道遠
 騎乗にも他の鞍にくらべ疲れぬ。馬にしろても、又
 キコウ、腰を圧迫される度が少いので疲れぬ。又
 前橋が高いので、キコウの大きな馬には特に向いて
 いる。北香、北渡、北涼に使用の鞍。

軍鞍 軍隊で（騎兵隊）使用する鞍、大きくてかなり
 重量がある。道遠鞍によく似ていて、同じように前
 後橋共に高く、又、鞍のうを取付け、毛布をつける
 ための特別の金具類が装備されている。

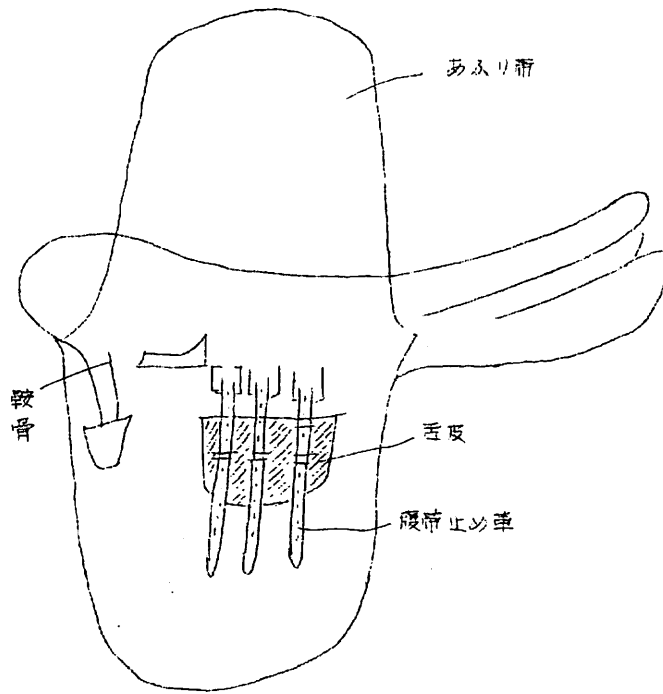
これは主として、兵卒用の鞍であり、別に拵鞍と云
 われる鞍もあった。それは技術鞍によく似ている。拵
 鞍の乗用馬は、矢卒のそれとは異った血種の良い馬
 が多かった。無用の重量をきらい、美觀を重じたた
 めだらう。

ウエスターンサドル（西部鞍）西部州でおなじみの鞍
 こんど西部州をみる時は、よくとごらんのように、
 腹帯の取付け等も異っている。機能は軍鞍と似てい
 るが、其の他にロースを練るための特別の装備があ
 る。

ジョッキー鞍（勝負鞍）競馬レース用の鞍、重量を極
 度に減ずるために、小さな一寸みるにたよりない鞍
 である。鍔も細く小さい。一斤鞍、半斤鞍と呼ばれ
 ている如く、その程度の重量よりなく、三点騎乗に



必要な最小限度の大きさしかなく、鞍を下すといふよ
 りは、鍔を保持するための締具の如き感である。
 鞍の構造と名称



乗馬用鞍について

鞍の種類

和鞍

ほとんどの木でできた日本古来の鞍。鍔も西洋のものとは異なる。日本の古式馬術に使用されている。

障壁鞍

あふり革が前方へ突出している。その先に填毛があり、膝の前方とび出しが防ぎうるようになっている。

鍔をつめて騎乗するさいに乗り易い鞍であり、その名の示すごとく、障壁飛越に向いている。

技術鞍

北涼・北場に用いている鞍。あふり革がまっすぐ下に垂れ下がっている。馬場馬術を行う目的のものである。

総合鞍

北斗に使用している鞍。名の示す通り、総合馬術を行うのを目的とした鞍で、馬場馬術・障壁馬術を通じて一つの鞍でまにあう利点がある。

障壁鞍の如く、あふり革は前方に張っているし、その前部に填毛がある。

北掄・北翠に用いている。

馬術講習

岡田征至

(一) 概説

こゝでは馬乗りとして必要な最小限度の知識を、特に飼育管理の方面から探つて、各部員の理解に助したいと思ひます。これは私のみの判断に従つて書きましたので、先ずハ分通り、完全なものではないと思ひます。完全なものに近いのは、日をあらためて出す計画もありますので、その時にゆずることにします。又、飼育管理のうちでも、こゝでは馬体及びその種類についてのことを述べようと思ひます。

軽種

一、アラブ種 産地はアラビアである、特産として
は、小格、持久力強、体質強、運伝力強等があげられる。

二、サラブレッド種 英国において改良されたものである。特産は大型、運力大、運伝力あり、等である。
三、アンタロアラブ種 アラブとサラブレッドの交配

及びこれら相互の交配によつて生じたもので、アラブの血量二五%未満のものは、準サラブレッドと称する。特産としては前二種の中間であり、運伝力は不確定である。

四、アラブ系種 軽半血種と、連続二代に亘つてアラブ・アンタロアラブ・アラブ系・サラ・準サラ又はサラブレッド系種の交配によるものとがある。

五、サラブレッド系種 アラブ又は軽半血種と連続二代に亘りサラ・準サラ・サラ系を交配したものとサラブレッド系とサラ・準サラ又はサラ系種の交配により生じたものとがある。

中間種

これにはアンタロノルマン種、アンタロノルマン系種、軽半血、中半血種、重半血種等のものが含まれる。

重種

ペルシエロン種、ベンシエロン系種、重系種など一般に馬の、バケモノ、思われる様な大きな馬の種類である。

軽半血種

軽半血種とは次の三種の交配によつて生じたものである。即ち(一)アンタロノルマン及びアンタロノルマン系並びに、これに準ずる中間種又は中半血と連続二代以上に亘り軽種を交配したもの、(二)軽半血種相互の交

配によって生じたものが、(三)中半血種と連続三代に亘り
終半血を交配したもので、その内、一代終種を交配した
場合があつても、又同杯である。

以上各種の馬について述べましたが、たゞこれを讀
んで覚えても、実際には、殆んど役に立たないであ
らう。まさに百聞一見にしかずです、要するに馬種に關
しては、実際に各種の馬に接し、その性質を自分の眼
でみるのそなければ何の得るところもないでしょう。
次に我々が部の弁なき又えとなつていくくれる競馬達
の種を上げますと、北倫を除くとあとは全部中半血で
ある。たゞ北倫のみはアンタロノルマン系種、略して
アノ系と呼ぶのである。

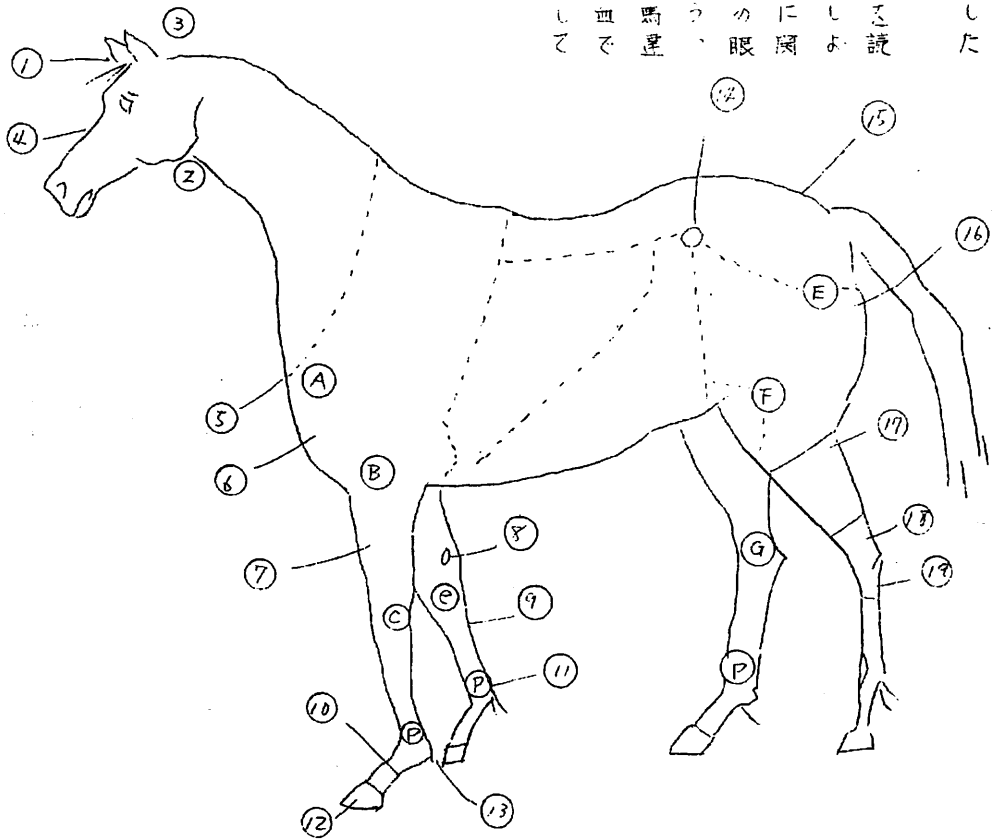
(三) 馬体外観名称

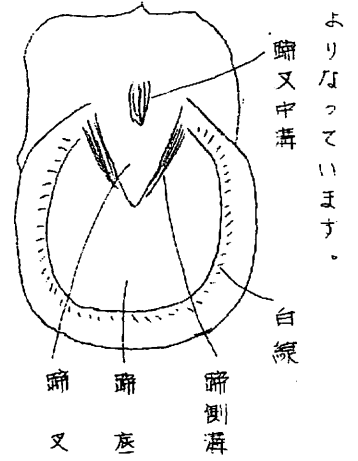
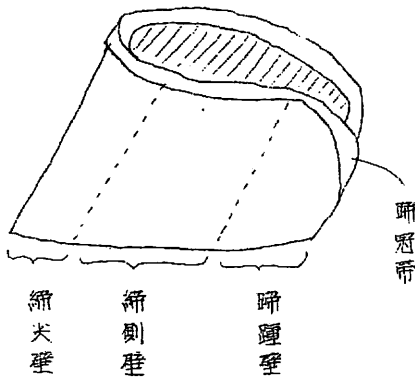
- 1 鬃
- 2 咽
- 3 頸
- 4 鬃梁
- 5 肩端
- 6 胸端
- 7 前脛
- 8 夜目
- 9 脛
- 10 繫
- 11 球関節
- 12 蹄
- 13 距毛
- 14 楔骨
- 15 尾根
- 16 尻端
- 17 膝
- 18 飛端
- 19 飛蹄

附

運動関係主要関節の名称

- A 肩関節
 - B 肘関節
 - C 腕関節
 - D 球関節
 - E 股関節
 - F 膝関節
 - G 跗関節
- 蹄の構造は角質部、知覚部、弾力部、骨部





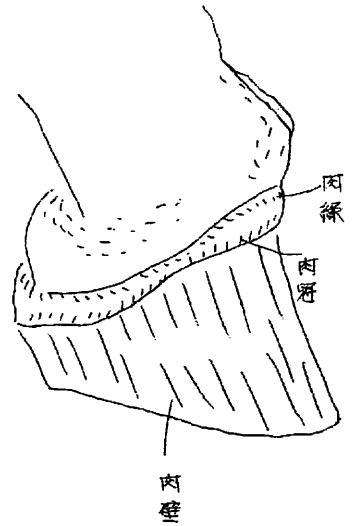
蹄はその構造によって運動のとき、即ち着地及び高地のとき、蹄の蹄壁が
 屈する、これを蹄根と云う。これによって反動をよくし、歩杯を軽くし
 裂蹄を予防し、蹄の成長を助け、蹄の栄養をよくするのである。

四白に名馬なし、という言葉は、白色の肢をもっている馬の蹄が弱いこ
 とを云っているのだから、我が部では北平が四白である。

蹄に起る故障として主にあげられるのは蹄叉腐爛と裂蹄であって、これ
 については、手入れの際常に注意を怠ってはなりません。

蹄の養生について大切なのは、次の四つ位があげられる。即ち、

- 一、蹄の乾燥を防ぐこと。
- 二、蹄壁の生長に注意すること。
- 三、蹄鉄の磨滅に注意すること。
- 四、永く跛蹄（鉄をつけない）としないことなどである。



何故私は馬術部へ

入ったか

滝 廻 子

何故、私が北大を送んだかという理由の一つは、「北大には馬術部があるから」ということでした。口の悪い人達には、「北大にはなくて馬術部に入堂するのだらう」とか、「馬術部に入るために、色々と試験勉強が大変ですわね」と等々、からかわれましたが、馬狂いが頭に乘かかっている者としては、そんな揶揄がかわかって光榮に思われる程で、勿論訂正する気など毛頭もありませんでした。

では、何故私はそんなに馬術部へ入りたかったのでしょうか。それは、六年前に始めて馬の背にまたがった時（あるいはそれ以前）から続いている。「馬に乗りたい、駄目なら触っているだけでも、見ていただけでもいい」と云う気持ち、次第に衰えるどころか、増々強まってきた。余程のことかない限り、あるいはあつても、強みどころもないからです。こんな気持ちになつてゐる者にとつて、目の前に馬術部があれば、入部するのは全く當然で、私の周囲の人々で、それに疑問や

異議をさしはさんだ人は一人も居りませんでした。

でも、なぜ私は馬がこんなに好きになつたのでしょうか。これは自分ではっきりとは解りませんが、まだ歩けない頃から、毎日散歩へ連れて行つては、馬や他の動物がいたりして、そばへ行つて話しかけることを教えたくれた祖父の影響だらうと思ひます。私の記憶の中で、馬は一度も恐ろしい動物として現われたことはありません。これは、その性度から考えても当然のことですが、不思議なことに、私が馬に乗つてゐると顔くじけ、恐ろしくありませんか」とたずねる人が多いのです。私にも、北條が耳を伏せて齒をむいてかゝつて来た時、北條にわずかに、一回しかみついただけで振り落された経験はありますが、これも馬の身になつてみれば、夫々に理由はあることで、こんなことで騒ぐ扱ひなどされては、それこそ心外なことでしょう。才一、振り落された本人が、今日はようやく北條に乗せてもらつたわ、むずか五分程だったけれどと得意気に話すのですから、聞き手としても「処置なし」と溜息を付くのが隣の山で、北條がいなくなつた今では、これも楽しい想ひ出の一つなのです。

新入部員としての責任を果すために、軽く書き流すと云う筈など出来ない私は、万軍筆をなめなめ、どうやら科目をつめて来ました。結論は馬と一緒にい

て乗るこじが楽しくて仕方がないから、と云う簡單なこじなのです。

毎年、夏休みを迎えると、馬術部は新入生を加えて合宿に入る。本州のように、ムシムシせず、ボアラ並木に夏風が涉り、馬に乗るには最適な季節である。

軍騎五時前の起床、ハードトレーニング、作業として厳しい規律というものは、慣れない者には苦痛であろうが、こうしてたくましく合宿焼けしたのちに、これからの馬術部を担う者が誕生して来るのである。また、北大馬術部独特の雰囲気作り出されるのもこの合宿に於てである。馬場では厳しいが、自由時間ともなると、もう先輩も後輩もない。

合宿のために部報を編集したことはなかったのだが、今年は新入生対象にこれを試みることにした。最初のこじで、不備な点が多いのが残念だが、これが好評ならば、おいおい充実したものを作りあげていきたい。去年の合宿記録も載せ得なかったことも心残りなことである。又、市川主将の原稿が同に合わなかったのは残念だが、次回に譲ることにした。尚、原稿のない部分については、各合宿に於て、講義でこれを補ってもらいたい。

とにかく気候はよし、合宿所は去年と隔段の良ざだし、この与えられたチャンスを最大限に利用して、大きな飛躍を上げてほしいものである。

ボアラ並木の観光客に目を奪われて、ドジをふむようなこじがけっしてないように。

(宮崎記)